［テレビドラマ］

コロナ禍の向こう側へのまなざし

太田 省一

原点回帰のなかの新たな試み

原点回帰。それが、2022年のテレビドラマに見られた傾向のひとつだ。

たとえば、NHK連続テレビ小説『カムカムエヴリバディ』。1961年に放送が始まった「NHK連続テレビ小説」は作品の9割が女性を主人公としており、初期の頃は特に戦争を体験した女性の一代記が多かった。『カムカムエヴリバディ』はその朝ドラの原点を踏まえている。

ただそこには、ヒロインを1人ではなく母娘三代の3人にするという新機軸があった。そこに脚本の藤本有紀ならではの伏線回収の名人技も加わり、100年に及ぶ複雑な運命の糸が絡む物語が感動を呼ぶ、今までにあまりない朝ドラとなった（第48回放送文化基金賞番組部門テレビドラマ番組奨励賞、同脚本賞：藤本有紀／東京ドラマアウォード2022作品賞連続ドラマ部門優秀賞、同助演男優賞：オダギリジョー、同脚本賞：藤本有紀／第60回ギャラクシー賞テレビ部門上期入賞）。

複雑な人間関係を描いて巧みだったという点では、1963年の放送開始以来、日本史上に実在した武将などの生涯を描いてきたNHK大河ドラマの一作『鎌倉殿の13人』も同様だ。三谷幸喜の脚本は、基本的史実を踏まえながらもその余白への想像力を駆使し、大河ドラマの原点でもある権力闘争を軸にした濃厚な人間ドラマを紡ぎ上げた。

その一方で、小栗旬演じる主人公・北条義時をありがちな理想主義者ではなく、冷徹なダークヒーローに仕立て上げたのは新鮮な仕掛けだった。悲劇の連鎖のなかにコミカルな場面を織り込む緩急の妙も円熟味を増し、三谷脚本のひとつの到達点を示した。

双方の作品に共通するのは、原点回帰のなかに新たなドラマの可能性を見出そうとする姿勢である。そしてそれは、現在の日本社会のリアリティを浮き彫りにするうえでも発揮されるものだ。実際、私たちの生きる原点である日常をとらえ直し、そこに新たなドラマを発見しようとする志向が、2022年の優れた作品に見られたもうひとつの共通項だった。

日常と地続きにある犯罪を描く

たとえば、日常生活と犯罪の関係を描いた作品に、その志向はよく表れていた。一見平

穏な日常のただ中に犯罪という非日常が突如姿を現すとき、そこにどんなドラマがあるのか?そう問いかけてくる作品が目を引いた。話題を集めた菅田将暉主演の『ミステリと言う勿(なか)れ』(フジテレビ)などもそうした一面を持つ作品だが、ここでは特に2つの作品を取り上げる。

まずは、中村倫也演じる弁護士と有村架純演じるパラリーガルがバディを組み、持ち込まれる案件の背後にある意外な人間ドラマを探っていく『石子と羽男 ―そんなコトで訴えます?―』(TBS)。2人に持ち込まれる相談は、スマホゲームへの課金トラブルなどどこででも起こりそうな小さなもの。だが解決の糸口をたどっていくと、隠された人間関係のもつれや関係者の意外な思惑が浮かび上がってくる。塚原あゆ子の洗練された演出などもあって、魅力的な作品になった(第60回ギャラクシー賞テレビ部門上期奨励賞)。

一方、『初恋の悪魔』(日本テレビ)の場合、メインとなる犯罪は連続殺人事件というおどろおどろしいものだ。それゆえに林遣都、仲野太賀、松岡茉優、柄本佑の個性豊かな4人が織りなす恋愛あり友情ありの青春ドラマのような日常との対比が際立つ。だが双方の世界は切り離されているのではなく、むしろ地続きだ。タイトルの通り、「初恋」と「悪魔」は共存している。坂元裕二の脚本は、印象的なセリフのやり取りで両極端な2つの世界を結び合わせていて相変わらず鮮やかだ。

テレビへの自己反省を促すドラマ

さらに違う角度から社会と犯罪の関係を描こうとした作品もあった。『エルピス ―希望、あるいは災い―』(関西テレビ)である。

長澤まさみ演じるテレビ局の女性アナウンサー・浅川恵那が、連続殺人事件の犯人とされた死刑囚が冤罪である可能性を知り、眞栄田郷敦演じるディレクター・岸本拓朗とともに取材を始める。そして新たな証拠を探り当て真相に迫っていくが、政治家からの圧力やテレビ局側の忖度によって壁にぶち当たる。

司法制度の問題点をテーマにしたドラマは、民放のプライムタイムではきわめて珍しい。と同時に、テレビ報道、ひいてはテレビそのもののあり方も俎上に載せられている点が鋭く、また新しい。そこにはテレビへの自己反省的な視点、そして「ドラマがどこまで社会の矛盾や問題に切り込んでいけるのか?」という真摯な問いかけがある。

この意欲的な企画の実現には、斜陽国となった近未来の日本を舞台にAIに選ばれた17歳の少年が衰退した地方都市を変えるため理想の政治を目指して奮闘する『17才の帝国』(NHK、第60回ギャラクシー賞テレビ部門上期奨励賞)のプロデューサーでもある佐野亜裕美の役割が大きかったと聞く。渡辺あやの脚本は、浅川と鈴木亮平演じる政治部記者・斎藤正一の恋愛模様、お坊ちゃま気質だった岸本の成長物語といったエン

ターテインメント的要素を巧みに織り交ぜながら、見応え十分の社会派サスペンスに仕上げている。

この作品が、ステレオタイプ化された娯楽作品が主流を占める現在のドラマ界に一石を投じたことは間違いない。ドラマの可能性を広げる意義深い試みであった。

コロナ禍と向き合って

ここ数年、私たちの日常を根底から揺るがしてきたのがコロナ禍であることは言うまでもない。それに伴い、コロナ禍という「日常化した非日常」をテレビドラマはどう扱えるのか?という課題が生まれていた。

しかしながら、結局テレビドラマはその問いに対峙することを避けてきた節がある。確かに、「密」を避けるため出演者やスタッフが一つの場所に集まらず、個別に撮影した映像をもとに編集、物語の構成をおこなった「リモートドラマ」と呼ばれるドラマは何本か制作され、そこには秀作もあった。だが多くは、コロナ禍のもたらしたライフスタイルへの表面的影響をドラマの設定として持ち込む程度にとどまっていた。

そうしたなか、『あなたのブツが、ここに』(NHK)は、コロナ禍が私たちの人生にとってどのような意味を持つのか?という問いを真正面から見据えた作品だった。

仁村紗和演じる女性は、キャバクラに勤めるシングルマザー。ところが、コロナ禍によって失職。そこで就職したのが、縁もゆかりもなかった宅配便のドライバーだった。彼女は慣れない仕事に悪戦苦闘し、落ち込む。

ほかにも劇中では、コロナ禍が変え、深刻化させた生活の様子が活写されている。主人公の実家のお好み焼き屋は客足がガタっと落ち、苦境に陥っている。宅配便の顧客である街の人々も、コロナによって予定していた仕事がキャンセルになったり、夫の介護をしているため極度に感染を恐れて宅配便のドライバーを玄関にも近づけないよう邪険に扱ったりしている。

このようにコロナ禍は、至るところに閉塞感をもたらす。だが主人公は、同僚や配達先の人々と時に衝突し、時に悩みをともに解決するなかで自分自身も救われていく。つまりこれは、コロナ禍で孤立した人々が再び「つながり」を取り戻していくドラマなのだ(第60回ギャラクシー賞テレビ部門上期入賞)。

コミュニケーションの本質とは

そしてそうした「つながり」の意味、言い換えれば「コミュニケーションとはなにか」を根本から考えさせてくれた作品が、『silent』(フジテレビ)である。

若者の恋愛ストーリーではあるが、その根底には、恋愛という枠を超えて、人と人とがコミュニケーションを取るとはどういうことか？　わかりあえるとはどういうことか？　という普遍的な問いが横たわっている。

川口春奈演じる青羽紬と目黒蓮演じる佐倉想は、高校時代に交際していた。その後疎遠になっていたものの、偶然再会を果たす。そのとき想は、病気によって聴覚障害者となっている。ただこの作品は、2人を絶対的な中心ではなく、2人の家族や友人、夏帆が演じる生まれつき聴覚障害のある女性など、周囲の人々との関係性のなかで描くことに大きく力点が置かれている。時には、そうした人々が主役としてきめ細かく丁寧に描かれる。

そこから、実はコミュニケーションとは多様なものであることが見えてくる。単に「聞こえる／聞こえない」ではなく、想のような中途失聴者、つまり聞こえる世界と聞こえない世界の両方を知る存在がいる。そうした人々が互いに交わり、音声、手話、文字など多彩な手段でやり取りをする。

もちろんそこには生きづらさ、コミュニケーションの困難さがつきまとう。だが一方で、そうした壁を越えて通じ合えたと思える瞬間があり、それが生きる希望になる。この作品が教えてくれるのは、そんなコミュニケーションの持つ両面性という普遍的な本質だ。

コロナ禍がいまだ続く2022年という年にこのような作品が登場したことは、示唆的である。直接コロナ禍を題材としてはいないが、そこで描かれる物語は、コロナ禍がもたらした孤立から再び連帯へと向かう未来の世界のメタファーに思えるからである。そこに読み取れるのは、ポストコロナの時代、コロナ禍の向こう側へのまなざしだ。

おわりに

他にも、恋愛感情や性的欲求をもたない「アロマンティック・アセクシュアル」の男女の共同生活をとおして家族のありかたを模索する『恋せぬふたり』（NHK）、父子家庭で、ろう者の父とそのコミュニケーションを助けてきた娘が結婚を機に親離れ・子離れする顛末を描いたホームコメディ『しずかちゃんとパパ』（NHK）、実在の俳優・松尾諭の自伝的ドラマで、実際に関わりのあった俳優たちが本人役でも登場する『拾われた男』（NHK）、夫と娘のもとに小学生の体を借りた亡き妻が戻ってくる『妻、小学生になる。』（TBS）、頑固な父親と「男を見る目がない」三姉妹の日常を描くホームドラマ『おいハンサム!!』（東海テレビ）といった良作があった。

2022年は、SNSとドラマの関係が話題になった年でもあった。SNSで視聴者が盛んに「考察」を披露し、人物描写やストーリー展開への疑問を書き込む「反省会タグ」がトレンドにもなった。それも、ドラマの楽しみ方のひとつだろう。だが他方で、ここで取り上げた作品

のように、すぐには言葉にならない深い感動や気づきを与えてくれる作品が多く生まれたことを記憶に留めておきたい。

おおた・しょういち

社会学者・文筆家。テレビと戦後日本、お笑い、アイドル、ドラマなどをテーマに執筆活動を続ける。著書に『放送作家ほぼ全史』（星海社新書・2022）、『水谷豊論』（青土社・2021）、『攻めてるテレ東、愛されるテレ東』（東京大学出版会・2019）、『紅白歌合戦と日本人』（筑摩選書・2013）など。放送批評懇談会主催のギャラクシー賞テレビ部門選奨委員。